The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞あるインド人女性の生きた現代史 ： 「私たちの姉（1925-2003）」を偲んで
Author(s)	Du, Amalendu; 桑島, 昭
Citation	アジア太平洋論叢. 2007, 17, p. 199-216
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

あるインド人女性の生きた現代史
ー「私たちの姉（1925-2003)」を偲んでー

オモレンドゥ・デー*
桑　島　　昭　訳**

1925年８月10日、チャカドゥ村で、フルクマリ・デーとゴーパール・チョンドロの間に最初の子供が生まれた。愛情をこめてショチラニと名づけられる。パドマ河のそばに、マダリプル・サブディビジョン（当時インド・ベンガル州ファリドプル県、現在はバングラデシュにある）のチャカドゥ村がある。しかし、私たちはマダリプル市に住んでいた。この都市で父は弁護士の仕事を始めたからである。パドマ河の支流アリヤルカ河がこの都市のそばを激流となって走っている。都市の道路はレンガで敷き詰められていた。河の流れで広い河川敷ができており、ここで子供たちが遊び、夕方には多くの人たちが集まる。マダリプルのかなりの人たちが、河で沐浴したり、泳いだりしていた。ときどき、鰐が暴れると、沐浴の場所を竹で囲む。夕方、クルナーから汽船が着くと、コルカタの新聞を手に入れる販売人の群れができる。汽船が接岸された道の両側には茶店や菓子を売る店が並んでいた。

1

マダリプル市は、教育・文化・政治の特筆すべき中心地である。どこの家でも誰かが国の解放闘争に参加して、監獄に入ったり、拘禁されたりしている。私の

---

* 元ジャダウプル大学歴史学科教授、アジア研究協会（コルカタ）前会長
** 大阪外国語大学名誉教授

父方の叔父ネパール・チョンドロ・デーは非常に優れた学生であったが、彼も革命運動に活発に参加していて、マトリック（大学入試）も受けていない。母はこの義弟を尊敬し、よく面倒を見た。母は、革命家たちの銃や重要文献をひそかに隠し、定められた場所に届ける責任を担っていた。母の信奉する神の台座が大事な物の隠し場所に使われていた。姉は、小さな頃から、こうした母のすべてをじかに見ることになる。母は、幼いときから、自分の家族にたいする責任を果たすとともに、広く社会のことも考え、国の解放闘争に熱烈に加わったのである。家族の皆が姉をかわいがった。このように恵まれて育ち、大きくなると、父と母と叔父は、姉を勉強させることにした。

マダリプル市には、女子教育のため、政府の努力でドナバン女子高等学校が設立されている。姉はこの学校に最優秀の成績で入学した。その後も、良い成績を残して、進級していく。私は、４歳年下だったので、姉の熱心な勉強ぶりをまのあたりに見ている。姉の友だちも、私をかわいがった。マダリプルには、女性の隔離制度はない。市の文化水準は高く、女性が街を歩くのも難しくなかったし、図書館に出かけて本を借り出すこともでき、川岸に散歩に出たり、集会に参加することも自由である。このように、開かれた環境のなかで、姉は成長することができたのである。

私の家では、姉の望みで、父が、当時、ラッパの上に犬が座っている絵の付いた蓄音機を買ってくれた。それとともに、優れた歌手がレコーディングした多くの歌も。ほかに、シラジウダウラ（プラッシーの戦いで敗れたベンガルのナワーブ）劇のレコードもあった。このため、多くの歌やこの劇の脚本を私は覚えてしまったものである。

チャカドゥ村から父方の祖父ラージモハン・デーがマダリプルに来ると、姉は物語を聞かせてくれとせがんだ。祖父の言葉によると、この物語の名は『ポルシュターブ』といわれている。２，３日をかけて、祖父は『ポルシュターブ』を話して行った。祖父は「語り部」として名声を得ていた人である。

もう一人の祖父ノヴィンチョンドロ・デーは国選弁護士であった。彼がマダリプルに来ると、母は彼のためにバター付きのトーストとお茶をいつも用意する。姉と私は祖父が来るのをたいへん楽しみにしていた。母が上手にトーストとお茶

を用意するのを見て、周囲の人たちの好奇心は尽きることがない。当時、マダリプルでは、１，２軒を除いて「トーストとお茶」の習慣は行き渡っていなかったのである。祖母もときどきやって来た。皆が姉を気に入り、かわいがった。

しばらくして、私たちの家族に重大な危機が訪れる。母が、何日か黒熱病に冒された後に亡くなったのである[1]。近所の若者たちが順番に病の床に就いている母の世話をする光景はいまも私の眼に浮かんでくる。火葬の場では、母方の年長の叔母ショティシュ・チョンドロ・デーが、私を胸に抱いて、死者の口に火をあてた。１ヶ月、護摩の供養は続く。父は、カシミールからブラーフマンを招いて、母の葬儀を行い、ブラーフマンには、ほかの物と一緒に牛を贈った。そうすることで、父は私たち、２人の姉妹と３人の兄弟の将来を思いやったのである。この頃、姉は私のそばにつきっきりであった。私が困ることのないよう気遣ってくれたのである。私、ヴィマル、ウシャ、そして、カマルには、母を失った悲しみがまだわからなかった。私たちの家族の世話を見てくれたのは、私の叔父と叔母である。もちろん、叔母を私たちはマシマ（母方の叔母さん）と呼んでいた。母の実の姉妹だったからである。母は、彼女を尊敬する夫の弟と結婚させ、一緒に住んでいた。叔父と叔母は、生涯の最後まで、自分たちの子供のように私たちを見守ってくれた。

姉は急にふけたようだった。母を失った姉は、自分の勉強とともに、私たちの面倒も見なければならない。ときどき、私は、市の外にあるさびしい火葬場の岸辺に座っていた、母に会うために。姉は私のことをとても心配した。そこに行くのは良くないと、私も理解し始める。行って、得るものはないと。姉にさとされて、次第に私は火葬場に行くのをやめるようになった。死んだ後では、ふたたび死者と会うことはないという知識を、私は小さいときに身につけたのである。

父は、母の父親の弟の娘と再婚した。この母にも１人の娘、４人の息子が生まれる。私たちは皆一緒に暮らした。父の姉妹の息子マナ（マノランジャン・デー）も、私たちと一緒に成長した。姉は、無限の忍耐力で、家が騒々しくならないように絶えず気を配っていた。それによって、彼女の母性豊かな姿が私たちの前に次第にはっきりと現われ始めた。父は、私たちのためにカラム（キャロム、手球の遊び）やルードゥー（さいころ遊び）などの道具を買ってくれた。レスリング

を覚えさせる為に、家にレスリング場までできた。姉は、身体を鍛えるために、縄跳びをしていた。彼女も、私たちとカラムやルードゥーの遊びに加わって、私たちを楽しませようと努めてくれた。

2

「50年の大飢饉」（ベンガル歴で1350年、西暦1943-44年のベンガル飢饉）は、複雑な状況が作り出した結果である。あっという間に米価は上昇する。塩が不足する。燈油がなくなる。飢えた人々が集団となって都市に集まった。毎日、道路や河岸、家の入り口には飢えに苦しんだ人々の死体が横たわっていた。『少しばかりファン（取り出した米の煮汁。塩を加えて飲む）を恵んで』という飢えた人たちの懇願。しかし、当時、それぞれの家ではファンバート（煮汁を除かずに炊いたご飯）を食べる習慣が広まっており、ごくわずかの家だけがファンを差し出すことができた。私たちは、朝遅くにファンバートを食べる習慣となっていた。飢えた人たちの悲しい状態を見て、母や叔母は、いつも、それを彼らに恵んでいた。飢饉と同時に、伝染病によっても多くの人が死に始める。死の行進が都市全体を包み込む。息を殺すような状況である。小麦粉を用意してチャパティーを食べる習慣が生まれたのは、このときである。父は２つの大きな石臼を買って来た。この臼を使って小麦粉を挽いた。姉が中心となって、私たちは小麦粉を作るのを手伝った。

ある日、姉は、学校から帰る途中、泣きながら、途方に暮れている５歳の男の子を見て、家に連れてきた。子供の両親は飢えで死んだという。その死体のそばに子供は座っていた。父が来ると、姉は、自分がこの子の面倒を見ると言った。父は、反対せず、むしろ姉を励ました。このベンガル人ではない子供の名はゴーワルダンという。姉は、この子の世話をいつも見ながら、家族の一員にしようと努めていた。約２ヶ月間、姉はこの「里子」のためにはかりしれない努力をする。しかし、ある日の早朝、私たちが眠りから覚めると、ゴーワルダンがいない。さんざん探しても、見つからない。姉の悲嘆はどんなに深いものであったか。私たちも皆ひどく悲しんだ。ようやく、姉は悲しみを抑えた。当時、姉は９年生であ

った。その年令で姉の性格には寛大さが現われてくる。個人生活における狭い了見や自己中心主義は姉には無縁であった。姉は、父母からこの性格を受け継いだのである。

1944年に、姉はマトリキュレーションを優秀な成績でパスした。官報に名前が掲載された。母の希望の一つが満たされる。試験をパスする前に姉を結婚させることを、母は禁じていた。母の第二の希望は、アリヤル村のシャルダー・クマール氏の次男マカン・ラール氏と娘を結婚させることであった。

マカン兄の友人で、マダリプル高等学校の教師ラカル・チョンドロ・デーを通じて、縁談は結ばれる。マカン兄は、当時、医師の勉強をしていた。父がアリヤル村に出かけて、マカン兄の父親と話した。マカン兄と会わずに、父親と話を詰めて帰って来る。マカン兄が医師の試験をパスして後、突然、彼の父は健康を害し、亡くなった。

マカン兄には土地がある。その土地からの収入で家族の生計を立てるとしても、家族には何の不足もない。このため、彼は、第二次世界大戦に際して、軍隊に医師として参加した。彼はインド東部の戦場で活動する。彼の経済的支援で、当時、この家族にはかなりのゆとりがあったのである。戦争が終わると、マカン兄は家に帰って来た。彼は姉を見に来た。彼の同意を得て、父は結婚の手筈を整えた。

1945年にチャカドゥ村の私たちの家で、かなり華やかに姉の結婚式が行われた。いまでも、そのときのことが心に焼き付いている。大きな乗合船に乗って、何人かの老人とともに、花婿と付き添いの人たちを連れて来るために、私たちは出発する。早朝、パドマ河のふところ深く乗合船はくり出す。川を渡るのにマル１日かかった。対岸に渡り、私たちがアリヤル村に着くと、夜になっていた。約200人の花婿側の人たちを連れて、１日がかりでその乗合船が戻って来ると、夕暮れ時の結婚式の直前である。私たちの家の池から大きな魚を獲った。マナカーン（マダリプル・サブディビジョンの地名）の祖父の家からも大きな魚が届けられる。豪華な宴であった。３日間、多くの招待客をもてなした。結婚式のためにこれほど華やかなお膳立てをするというのは、この地域では珍しいことである。父方の叔父、母方の大叔父、そして、ゴーピーママとして知られる母方の叔父が、その準備をした人たちのなかにいた。白い皮膚で、美男の「ジャマイ・バーブー」

（義理の息子）に、皆が見とれたものである。

花嫁が夫の家に二度目に入った後で、マカン兄と姉は、私をアリヤル村に連れて行く。都市で成長した姉にとって、田舎の、偏見に満ちた環境のなかで大家族に自分を適応させていくことがどんなに困難なことか、それがわかる年令に私はなっていた。姉はすべての人を大切にする。また、すべての者が私を大事に受け入れてくれた。姉の義母、夫の兄、ハリビノード兄と彼の妻が私をとくに大事にしてくれる。姉の３人の義弟、トルニ兄、ジャガ兄、それにサントーシュと私はとても親しくなる。「ジャマイ・バーブー」が、私たちのマカン兄となる。マカン兄が唯一の収入のかせぎ手である。しかし、そのことで姉がおごることはなかった。母に倣って、姉も自分の義父の家を自分の唯一の家として受け入れ、その喜びと悲しみを分かち合ったのである。私の母がそのような教育をいかにすばやく施したか、それを見て、義母、姉の嫁ぎ先の母はとても喜んだ。

マカン兄が、東ベンガルのメディカル・センターで仕事に携わっていたとき、私はときどきそこに出かけたものである。マカン兄は定期的に家にお金を送り、行き来もしていた。姉は嫁入り先の母の家に暮らしていた。このような状態の下で、1946年の政治の嵐が普通の人たちの生活を不安に陥れる。ヒンドゥー・ムスリム間の相互不信が都市と農村における普段の生活を破壊する。アリヤル村でも、高まる不信感が噴出した。

この頃、姉は妊娠して、マダリプルに帰っていた。私たちの家で、マカン兄と姉の間に最初の子、コカンが生まれた。インドは分割された。インドの方向へ、ヒンドゥーの人たちが集団となって移り始めた。恐るべき悲劇がベンガル人の生活を襲い始まる。まず、マカン兄と姉が、コカンを連れてコルカタに来る。のちに、義母、ジャガ兄、サントーシュを連れて来る。土地財産を管理するためにアリヤル村に残ったのは、ハリビノード兄とトルニ兄の二人である。当時、病院には医師が不足していた。マカン兄は、ベレガタ（カルカッタ市内）にある公立の病院に勤務した。そこにある住宅に姉はコカンを連れて世帯を持つ。あるときは、マカン兄は、スバーシュ村の駅から少し遠い所に一軒の家を借りて住み、そこから行き来して、病院の仕事をすることもあった。

インド分割は、我々家族全員を逆境に追い込むことになる。こうした状況の下

では、私はコルカタで勉強をしなければならない。コミュナルな敵対の故に息もつけないような状況の下で、父と母は、兄弟・姉妹とともにマダリプルにとどまらなければならなかった。不安定な将来を考えれば、大家族とともにインドへの道に足を踏み出す勇気は、父にはなかったのである。生き残って、子供たちの勉強のために条件をどのように整えるかという困難な闘いに父は直面していた。そのことを思うと、いまでも、私は深い悔悟の念に切り裂かれる。

3

姉は、ベレガタの小さな住宅で自分で料理をし、また、コカンの面倒を見た。コカンが両足をひどく打ったことがある。マカン兄が病院の夜勤のとき、私は出かけて、夜、姉と一緒にいた。コカンを胸に抱いて、静かにさせようとした。その間、姉が少しでも眠ることができるように。休みの日にも、私はコカンを見守って、姉が仕事をするのを助ける。その後、マカン兄は、バンクラ、バフラムプル、そして、クリシュナナガルの病院へと勤務地を変えた。バンクラでは、彼の第二子、ニルモニが生まれる。その後、バフラムプルで、三番目の子供、シブが生まれる。マカン兄がバフラムプルの病院で仕事をしていたとき、父はウシャを送ってきた。ウシャをマダリプルにとどめておくことはできなかった。ウシャは、マダリプルの学校とカレッジで勉強し、コルカタの医科大学に医師となるため入学した。

コルカタで学んでいるとき、私は、栄養を十分にを取ることができなかったため、腰痛に襲われ、普通に歩くことができなくなった。たんぱく質の不足と勉強のし過ぎが、私をこのような状態に追いやったらしい。何ヶ月か、R. G. カル病院（北コルカタにある）で学生用の無料ベッドで生活した。いろいろな医師たちの思い出が残っている。後の首相B. C. ロイ（1882-1962：医師、カルカッタ大学副学長　1942-44、西ベンガル州首相　1948-62）も、何日か私を見てくれる。助かるかどうか疑いを抱いたこともある。１年間勉強を台無しにした。カレッジに行くことができなかった。ときどき、１日に２回注射を打ったこともある。姉が食事の面倒をみてくれた。少し良くなり、ベルトを着けて、マダリプルに出か

けた。そこでは、母が私の面倒を見てくれる。私はコルカタに来て、再入学した。痛みは簡単には引かなかった。しかし、精神力でその痛みを克服するほかなかったのである。こうした状態で、B. A. とM. A. にパスした。ときどき、姉の所で食事をして、体調を維持した。さらに、母と姉妹関係にある叔母、父の弟である叔父、母方の年長の叔父とその妻である叔母が私をとても良く面倒をみてくれた。悲しいとき、困ったときでも、この難しい闘いの日々に、この人たちの愛情のこもった看護が、私の心を安らかにしてくれた。

その後の出来事において、姉はいつも私の心の拠り所となっている。当時、マカン兄はコルカタで病院に勤務し、デベンドラ・ラール・カーン通りの大きな塀に囲まれた官舎に住んでいた。私の結婚式もこの家で行われている。友人・親戚の人たちをお茶や飲み物でもてなした。その後で、私たちのもう一つの生活が始まった。私たちは、姉の近くにいて、いつもなにかにつけ助けてもらっていたのである。

コカン、ニル、シブは皆、大きくなり、彼らは勉強に励んでいた。姉もカレッジに入学し、I. A.（予科）、B. A.、と B. Ed.（教育学士）にパスした。姉が家族の全責任を果たしながら、自分の勉強に関心を持つことができたとは、想像を絶する。しかも、そのことで、姉の知り合いの範囲はとても広がることになる。シブは、当時、セント・パラス・カレッジの学生であった。家にモニディパという名の少女が来ていた。姉を「お母さん」と呼んでいた。家の娘であるかのように、彼女は滞在していたのである。シブの友人でもある。シブは、いつか姉の知らないうちに、ナクサライトの運動に加わっていた。マカン兄と姉はひどくそのことを心配し、その後、シブをヨーロッパに送った。いま、彼はベルギーに住んでいる。そこで子供たちとともに世帯を持っている。政治の舞台とはずっと以前に縁を切っていた。いくつもの言葉も知り、技術を身につけて、いまは良い仕事をしている。

他方、モニディパも、ナクサライトの運動の波のなかに身を投じていた。しばらくの間、姉とも会っていなかったが、突然ある日、ダムダム監獄の入り口で姉がモニディパと会った。そのとき、マカン兄は、モニディパが有名なナクサライトの指導者アジズル・ハクと結婚していることを知る。当時、モニディパは子供

を抱えて、苦しんでいた。アジズル・ハクが釈放されて後、彼とモニディパに姉は力を貸すことになる。アジズルの健康状態を見て、姉は、ある日、眼に涙をためて彼のことを私たちに話した。マカン兄が身体の悪いアジズルを病院に連れて行ったこともある。アジズルの男の子が亡くなったという知らせを受けて、姉とマカン兄はとても悲しんだ。

クンジビハーリー・ボース通り４番地に家を建てて、落ち着いた後も、姉はいくつかの不幸に遭遇する。姉のもとには義理の母がいた。姉は彼女の世話を見た。それぞれの父、母には子供たちについての夢がある。姉にもあった。しかし、すべての夢が満たされるわけではない。姉の場合も同様である。男の子たちは、それぞれ能力を身につけて、外国で生活することになり、姉は言い様のないさびしさに襲われた。長男の嫁がアメリカにおいて自動車事故で亡くなったとき、姉にとってどんなに耐え難かったかと思う。マカン兄と姉は、コカンと２人の娘をコルカタに呼び寄せた。シブの妻も、３人の幼い子供を置いて、突然に亡くなってしまう。1998年11月24日、ウシャもマルダ市で亡くなった。マカン兄と姉は、こうした出来事に心を痛めていた。

こうした不幸の続くなかで、姉は心の平安を求めて外に出て、そこで多くの女性を知るようになる。彼女たちは連れ立って、朝早く散歩し、ときには、コルカタの外に出る。その何人かを、私たちも知っている。姉は、「家」の外の見晴らしの良い場所に出て、自分自身を広げていった。友だちは、ラニディと呼んで、彼女を大事にしてくれた。

まさにインド分割のとき、姉はマダリプルからやって来た。その後は戻っていなかった。バングラデシュ国家成立の後に、姉は父と会うために出かけた。母、シャモル、アノルの妻が丁重に姉を迎えた。皆と一緒に幸せを噛みしめて、姉は帰って来た。ウシャの家にも出かけた。ウシャとバリドが姉をもてなした。姉はその何日間かの良き思い出を私たちに話してくれた。

自分の家族のことだけでなく、私たち皆のことを気遣う姉の気持に限りはない。マナの妻が亡くなった。マナの子供たちを思って、姉は悲しむ。自分の家族の喜び・悲しみだけでなく、一族の喜び・悲しみが、姉によって語られる。ヴィマルが突然病気になった。彼をナーシング・ホームに入院させた。姉はとても心配し

ていた。その後、マカン兄も病気となり、ナーシング・ホームに入った。姉は、毎日２度、ナーシング・ホームに出かけた。姉は気力で生きる人である。自分の身体のことを決して考えたことはなかった。

息子たちのことも、姉は誇りにしていた。コカンは、アメリカで多くの人たちを支援した。『アーナンド・バーザール・パトリカー』紙に、１人のポーターの息子が、合同入試（工科・医学系に進むための）にパスして、医学コースに入学する機会を得たというニュースが掲載された。彼はバンクラ医科大学に入学したが、学費を工面するめどが立たない。新聞でこのニュースを読んで、コカンはこの青年に協力し、医学を学ぶ全費用を負担するという内容の手紙を彼に送った。毎月、コカンは彼に1400タカを送金した。もう１人の息子ニルも良い仕事に就いている。しばらく前に、叔父がヒマラヤの丘陵地帯でサンニャーシー（修道僧）とともに修業に励んでいた。そのとき、ハーブからリュウマチの薬を作る方法を知る。それを皆、叔父は書きとめていた。父がニルモニにこの薬を作る方法を教えた。ニルモニは、いま、アメリカでこの薬を作り、いくつかの不治の病を治そうと努めている。姉は、ニルモニがいつか成功することを期待していた。妻を失ったシブは、３人の子供の面倒を見続けており、姉も少し心が休まった。

父方の年下の叔父ウトゥポルは、工芸家である。彼はアーメダバードに住んでいた。何ヵ月か前に癌を患っていることがわかり、コルカタに来た。姉は急いで彼に会いに行った。ウトゥポルは涙を流したという。姉はウトゥポルの葬儀にも出席している。ニルマル、マヌ、コカン、ジュヌ、兄弟皆にとって彼女は姉であった。それ故、姉は皆を慰めるためにいつもその中心にいたのである。

カマルが、この頃、厳しい生きるための闘いに巻き込まれていた。次第に、こうした状況から自由になることができた。モンゴルも世帯を持つことが出来た。カーリーも結婚して新しい生活が始まる。そのことで、姉の心にしあわせの気持が強く認められるようになる。彼らにとっても、彼女は姉である。さらに、母方の叔父のすべての者と姉は親しかった。すべての者が彼女を敬愛していた。

母が亡くなる。アノル、シャモル、カジョルが、ダウプカル（西ベンガル州北24パルガナにある）で母の葬儀を行った。マカン兄と姉が出かけた。ラーヌーについては、最初から、姉は娘のようにかわいがっていた。その場所で、我々は皆

会うことができた。このようにして、インド分割の災禍から我々は自分たちを守ることができたのである。毎年、バーイー・フォーターの祭り（ヒンドゥーの姉妹が兄弟の額にびゃくだんを塗って、愛情を確かめる）のとき、我々は姉の家に集まる。しばらくして、姉の家族ではヴィーナーが責任を果たすようになった。姉と彼女との関係は、母と娘のようである。そして、私たちの母方の叔母の娘、ラマがそばにいた。彼女は姉の良き仲間である。必要があれば、姉は彼女を呼び寄せた。

数年前、シロンから、私が講演を頼まれたことがある。姉も私と一緒に行った。私たちはゲストハウスの大きな家に泊まった。姉が、数日間、とても楽しそうに過ごしたのを覚えている。マカン兄と姉は、私たち家族のすべての儀式に出席しようと努めている。ニシャンの誕生日の祝いには彼ら２人ともいた。しかし、ジジャーの誕生日には、マカン兄は身体が悪く、来られなかった。姉はシャンオリを連れてやって来た。何ヵ月か前、コカンは２人の娘、モナミとシャンオリを連れてきていた。姉は彼女たちに会って、とても喜んだ。シャンオリの誕生日には、姉は立派なホテルに友人・親戚を招いて、ディナー・パーティーを開いた。アーサフ・アリ（デー夫人の弟）、彼の妻と娘も、姉は招待している。このディナー・パーティーの責任者となったのは、ブンバとニリ（デー氏の姪）である。幸せに満ちた夜、私たちは姉のまったく新しい姿を見ることができた。

4

10月２日(2003年)、姉の家に行った。姉は家にいなかった。しかたなく、マカン兄と話をして、７時半に外に出ると、１人の女性の手につかまって、姉がゆっくりと家の方にやって来る。姉は私に尋ねた。『何か食べたの』。私は、『お茶なしで、お菓子を食べた』と答えた。翌朝早く、姉は、７着のドーティーとサリー(秋の祭にドゥルガ神を始めとする神々、また、祭りを司る僧に捧げるため)、その他の物を携えて、ドゥルガ神殿にラマと一緒に出かけた。その日から彼女の歩行が困難となり、ほとんど口が利けなくなる。10月５日の朝早く、マカン兄から電話が入る。ナシマ（デー夫人）が受ける。そのとき、私は市場に出かけていた。

マカン兄は、私に来るようにと言った。姉のことを私に話すために。市場から帰ると、マカン兄に電話し、いま行くと伝える。行って見ると、姉は話すことも出来ず、歩行も困難であった。マカン兄が尋ねた。『言いたいことをアマルに話して』。姉は少しも話すことが出来ない。私がヴィマルに電話して、すべてのことを知らせた。いまや、姉をどこかナーシング・ホームに連れて行く必要がある。ヴィマルは、シュリー・オロヴィンド・奉仕センター（南コルカタにある）に送ろうと言った。ヴィマルもやって来た。私は、ヴィマルに、私がすべてを準備して、それを知らせると言う。家に戻り、電話してすべての準備をした。ブンバとニリが私と一緒にいる。セーワー・サダン（奉仕センター）から救急車に来てもらい、３時10分に出発した。朝４時に姉を入院させた。

10月16日４時45分に姉は集中治療室で亡くなる。セーワー・サダンから、来るように言われた。その知らせをラマはナシマに伝える。ナシマはエシアティック・ソサイアティ（アジア研究協会、1784年創立）にいる私に知らせて来た。私はかけつけた。姉が最後の息を引き取ったことを知る。ナシマに知らせる。彼女が皆にそれを伝える。知らせを受けて、ソマがナシマのところにかけつける。スルジットも来たので、彼の携帯電話を使って、私は協力した。マハデワが来た。ヴィマルたちが来た。アマルとムニア（デー氏の娘）が来た。バブラが来た。バッチューが来た。ムニアが行って、姉を見て来る。この間、ジェティンも自分の車で来る。ヴィーナーとラマに、家に行って姉のためにいいサリーを取って来るように言った。看護師たちが姉の身なりを整えてくれるだろう。のちに、ニリの叔母が来た。

家に一度帰らなければならない。ガウリーとアマルが一緒だった。ニルが電話して来る。ナシマが話す。私とも話した。その後で、コカンとニルが何度もナシマと話した。夜９時に姉を連れて行くための車が来る。飾りに使う花を持って来るため、スルジットとバブア（デー氏の息子）をヴィマルの車で送った。９時45分にマルデワとアマルが姉を下ろして運んで来た。ガウリは、姉の髪の分け際に朱（シンドゥール）、足にラック（アルター）を塗る。私、ヴィマル、ほかの人たちは花を捧げて、供養した。私たちは、10時20分にシュリー・オロヴィンド・奉仕センターから出発する。途中、ジャダウプルで車を下りて、アマルが死亡証明書のコピーを撮って来る。店の主人はコピーの料金を取らなかったという。ヴィ

マルの身体は良くない。このため、私はヴィマルを家に送った。マハデワ、スルジット、アマル、ジェティン、バブア、バッチューと私がいろいろと寄り道をして、最後に、ガリア・アーディ火葬場（守護神はカーリー）に着いたとき、夜の11時になっていた。12時15分、姉は火葬に付された。辛うじて深い悲しみを抑える。喜びと悲しみを共にしてきた道のりに別れを告げた。真の闇が訪れたのである。しばらくして、マハデワが土器に姉の遺骨を入れて来た。私がそれを元ガンガ河に流さなくてはならない。

夜中の１時半に家に帰ると、ナシマは電話の前に座っていた。コカンとニルが何度も電話して来る。マカン兄も電話して来る。帰って来た私は、彼に電話ですべてを話した。マカン兄も電話のそばに座っていた。電話を共にしながら、マカン兄はすべてを聞いていた。姉以外のことを話すことは出来なかった。マカン兄の喉は悲しみで詰まっていたように見える。姉との別れがどんなに深い心の痛手となっているかを察して、私の眼も涙で溢れる。

訳者あとがき

原文はベンガル語で書かれた12ページの小冊子、Amalendu De, *Amader Bardi* であり、その発行所、発行年は示されていない。著者のオモレンドゥ・デー氏の訳者への説明では、2003年10月18日、即ち、姉ショチラニの死のわずか２日後に書かれている。近親者や親しい友人のために、そして、なによりも姉ショチラニのために書かれたものであろう。

オモレンドゥ・デー氏は、元ジャダウプル大学歴史学科教授で、コルカタにあるアジア研究協会の会長の職にもあった歴史家であり、「世俗主義」の視点からベンガル・ムスリムの近代史・近代思想史をとらえた研究書が多い。氏の研究の特色は厳密な引用註の作成を基礎とした手堅い論理の展開にある。しかし、亡き姉へのレクイエムとして書かれたこの文章に註はない。それだけに、姉にたいする万感の思いのなかに、氏の歴史観が素直に表現されている。デー氏が、インドにおける「世俗主義」の歴史について執拗に発言してきたその背景も、この文章から理解できよう。

ショチラニの生涯は、「トーストとお茶」が珍しかった1930年代から、車と携帯電話の使用がインドの都市生活に広がるようになった21世紀始めにまでに及んでいる。この間、ヒンドゥー中間層の比較的恵まれた環境に育ったとはいえ、幼くして母を失うという家族の不幸と、ベンガルの「分割」を伴ったインドの「分割」の結果、自分の意志に反して、両親とは別の国家のなかで生活せざるをえないという民族の不幸が、ショチラニの姉としての責任をきわめて重いものにした。ここには、無名の女性が、強い意志で南アジアの現代史を生き抜いた姿が描かれている。その意志の強さは、自分の信ずる神像の台座をも、革命運動に使う品物を隠すために使った母から学んだものであり、その精神は、家族を抱えながら大学に通ったショチラニの勉学への意欲として継承された。

マダリプル・サブディビジョンは、1943年のベンガル飢饉においてもっとも深刻な影響を受けた地域の一つである[2]。マダリプル市の家々に食べ物を求めて歩く難民の声が、デー氏の筆によって書き留められている。ショチラニは、そのとき、両親を失った幼い子供を家に連れてきて、面倒を見るとともに、ある日、突然いなくなったその少年にたいする悲しみを乗り越えて、自分の願いとは異なる道を生きようとする人の存在を認めるようになり、寛容さを身につける。

ショチラニとその家族にとっての最大の試練は、1947年８月14－15日のインドの「分割」、それに伴うベンガルの「分割」によって、コルカタに職や勉学への道を求める息子や娘たちが、幼い子供の教育を思いはかり、土地財産の管理を考え、住み慣れた土地を離れて不確かな未来に身を委ねることを躊躇した両親から別れざるを得なかったときである。この後、国境によって隔てられた親と子の接触は、彼らの人生と南アジアの現代史の節目にかろうじて保たれるだけとなった。かくして、インドでの生活を選んだ家族の者の間で、ショチラニは親代わりの役割を果たすようになる。その道のりはけわしいものであったが、逆に、彼女の「家」「家族」にたいする考え方はより開かれたものとなっていく。

1970年代、武装革命派のナクサライトの影響下に息子の１人が入ったことを心配する一方で、若いナクサライトの夫妻と子供の健康に心を痛めるのも、ショチラニの思想的共鳴から発しているというよりも、自分の知る者が苦境にあることを見過ごすわけにはいかないという広く開かれた生活者としての姿勢から生まれ

たものであった。

晩年、ショチラニは、息子たちが海外に移住して、寂しさを感ずることもあったが、自らも、「家」の外の「見晴らしの良い場所」に出て、新しい人々との交流のなかに生きがいを見出している。国境によって家族の生活を引き裂かれたショチラニは、国を出て行った家族のメンバーの成長に安堵するとともに、自分がそのような時代に生きていることを認識していた。

大家族の全員にたいする行き届いた配慮とともに、歴史が投げかける苦難の影を背負いつつ、それぞれの時点で精一杯生きようとしたその姿勢こそが、オモレンドゥ・デー氏をふくむ家族の信頼と尊敬を獲得したのであろう。ショチラニの生涯は、まぎれもなく、南アジアの現代史と重なっていたのである。

この文章のなかには、1930－40年代のベンガルにおける食生活の変化のほか、母の重病と葬儀、姉の結婚式についての詳細な説明がある。母の重病に際して近所の若者たちが順繰りに行った看病、伝統に沿った父の供養の姿、河岸に座って死者と会えるのを待つ少年オモレンドゥ、こうした光景は、次第に背景へと退きつつある。３日がかりの結婚式の形はいまも変わらないにしても、その雰囲気は変わってきている。また、当時の多くの婚姻関係が限られた地域・親族のなかで成立していたことを示す事実も興味深い。なお、オモレンドゥ・デー氏の宗教を越えた結婚については、さりげなく触れられている。

一方、2003年における姉の入院と死後の段取りはすべて家族の者によって準備されている。病院には集中治療室があり、死者を運び、火葬する施設もここでは整っている。死者への思いも変わらない。しかし、合同家族制の崩壊と地域のサポートの欠如で死者を火葬・埋葬の地へ運ぶ人を欠くようになっている所もある。パトナーでは、このような活動を支援する自発的な市民組織がすでに1967年に成立し、その後縮小を余儀なくされながらも今日に至っている。この組織を発足させたのは、ベンガル人のグループである[3]。

大都会の殺伐さは、数多くのことが語られてきたコルカタについても例外ではないが、死亡証明書のコピー代を受け取らなかった商店主の心遣いに、人のかかわりが感じられる。自動支払いのコピー機は便利ではあっても、この機能を持たない。

オモレンドゥ・デー氏のベンガル語、英語による著作は多数あり、ここに列挙できないが、氏の作品のうち、二つは日本語訳で読むことができる。

1．A. ディ著、佐藤宏訳『印パ分離への道－あるイスラム思想家の悲劇』アジア経済研究所　1970年。

2．オモレンドゥ・デー著、本田史子訳「独立後のインド社会－コミュナル暴力・カースト対立・エスニック紛争－」H. G. パントほか著『アジアからのメッセージ－アジア、南アジア、そして、インド』嵯峨野書院　1999年。

最後に、この貴重な追悼の文章を日本語に訳すことを許可していただき、私の細かな質問にも丁寧に答えてくださったオモレンドゥ・デー教授に感謝の意を表わしたい。

付記：ショチラニさんの夫マカン・ラール氏は、2007年５月24日に永眠した。享年88歳。３人の息子は海外で生活しており、デー教授がお別れの儀式で「マカン兄」を見送った。

注

1　オモレンドゥ・デー氏の手紙によると、母親フルクマリの死因はマラリアであったことが、父親の自伝、Gopal Chandra De, *Amar Jiban*, Calcutta, 1985でのちに確認できたが、亡くなった年については1936年と推定されるものの、この書物でも明らかではない。

2　P. C. Mahalanobis *et al*, "A Sample Survey of After-Effects of the Bengal Famine of 1943", *Sankya*, Vol. 7, Part 4, 1946.

3　Sudhir Kumar Jha, *A New Dawn-Patna Reincarnated*, Patna, 2005, pp.155-56.

Amader Bardi – Our Elder Sister Sachi Rani Badra (1925–2003)

Amalendu De*
Translated by: Sho Kuwajima**

This is a translation of Amalendu De, *Amader Bardi* (Our Elder Sister) written in Bengali. The date and place of publication is not shown in this booklet of requiem. According to the information provided by the author Professor Amalendu De, it was written on 18 October 2003, two days after his elder sister Sachi Rani passed away in Kolkata.

It is a personal history of Sachi Rani, but at the same time a record of one Indian lady who passed through the contemporary history of South Asia with her strong will.

Besides the death of her mother Phulkumari in the middle of the 1930s, she faced the Second World War and Bengal Famine of 1943, the Partition of Bengal along with the Partition of India in 1947, the rise of the Naxalite movement in Bengal in the 1960s and the 1970s, and the migration of Indians to Europe and America in the latest years of the 20th century. While considering the meaning of each of these experiences sincerely, she developed her strong sense of responsibility, open-mindedness towards different opinion or different way of life, and broad view of things.

In this writing Professor De describes social rituals like funerals and marriage ceremony in details, which provide useful information. His account of a change in

* Former Professor of Indian History, Jadavpur University
Fomer President, The Asiatic Society, Kolkata
** Emeritus Professor, Osaka University of Foreign Studies

the dietary life of Bengal is also interesting.

It is really touching to know that Phulkumari, who supported the revolutionary movement, used the pedestal of an image of the Hindu God, in which she had faith, for keeping revolutionary literature or weapons in secret. Also the voice of the victims of the Bengal Famine asking for food is recorded here.

I am thankful to Professor Amalendu De, former Guru Nanak Professor of Indian History, Jadavpur University and former President, The Asiatic Society, Kolkata for giving me his permission to translate into Japanese this memorable requiem, written hurriedly with a thousand emotions and without footnotes, but with the calm observation of a dedicated historian.